

# 集

俳句フォーラム

2005年7月 第16号

## 季の会

初 曆

板倉工三

亡き姉の夢に出てくる梵天祭  
煙突からはき出されたり冬の雲  
ひらがながはみ出す園児の初曆  
冬晴れや車中で交わす死後のこと  
オペを待つひとりの部屋よ名残雪

寢正月

小林晋子

抗 菌 の 俎 立 て て 寢 正 月  
俳 人 に し め 切 り と い う 枷 雪 搔 く か  
ク レ ー ン 立 つ 米 代 川 に 鴨 の 陣  
花 籠 一 つ 届 い て 雨 水 な り  
長 靴 か ら 猫 が 顔 出 し 名 残 雪

名残雪

川口松生

寢正月メモに未完の句がひとつ  
雪虫の宙返りする小半日  
クリオネの舞うが如きに名残雪  
雪吊りをはずせば庭木孕みおり  
待春やばきばき鳴らす指の骨

除雪車

佐藤稲詩

青 汁 を 飲 み 元 朝 の 願 い ご と  
梵 天 に 運 起 を 詰 め て 登 り 行 く  
雪 搔 い て 五 臓 に わ た る 朝 の 汁  
除 雪 車 が 未 明 の 眠 り 搔 い て 行 く  
名 残 雪 蛇 ノ 目 行 き 交 う 古 都 の 路

霜 柱

小塚嘉人

報 恩 に 社 標 建 つ る や 霜 柱  
梵 天 に 託 せ る 愛 の 多 か り き  
寒 空 に そ び え た る 撫 朝 日 射 す  
南 天 に 餌 を も と め て つ が い 鳥  
寢 正 月 よ う や く わ れ に か え り け り

雪を掻く

佐藤利夫

初詣 足もと凍る 位牌堂  
梵天やじょやさの声に湯気が立つ  
大寒を笑うがごとき朝の雨  
ご近所も健在なりし雪を掻く  
余寒なお合い言葉出る今朝の街

春告げ草

村井節子

如月や静かに訪う鳥の声  
積もる雪朝を待たずに逝きし母  
名残雪友と語りし村の道  
名残雪写真の母と語る夜  
鉢植の春告げ草に香る部屋

初詣

藤嶋まさと

元日の闇音感が敏くなる  
初詣きりりと結ぶ靴の紐  
梵天の声が飛び交う杉並木  
拾い読む電光ニユース寒の雷  
雪掻くや朝の五体をみなぎらせ

句評

季の会読後片片(13)

集十五号作品より

藤嶋まさと

今冬は秋田も例年になく積雪で、春の訪れもいつもの年より一週間ほど遅かった。それでも、彼岸の中日が過ぎる頃ともなると、陽光に和らぎも出て、北国特有の空の明るさが日に日に増し、春が駆け足でやって来る。一面の白銀であった田圃も一気に春の装いとなり、北へ帰る白鳥の群れが休息地として一時の羽を休め、戯れているのを目にすると、今年も間違いないく白鳥が春を運んできてくれたことを実感する。

白鳥がふるさとへ帰る。その旅路は長い。そのひときをこの地で休息し、旅路のための鋭気を養っている。この光景は、今まで雪に閉ざされていた北国の人々に、春の明るさと生きる勇気を与えてくれるのである。

やがて、白鳥がこの地から北へ旅立つ頃には、桜前线も北上し、花だよりも聞こえて来て、北国にも本格的な春がやって来るのである。

人声も時雨も聴いて「眠り猫」

晋子

「眠り猫」というのは、いうまでもなく日光東照宮の「眠り猫」であり、左甚五郎の名作といわれている作品である。本当に眠っているようなあの表情は、何ともいわれない穏やかな表情であるが、猫は目は眠っていても耳は起きているといわれ、常に耳をピクピク動かし、音に対して敏感である。

その日はあいにくの時雨であったが、観光客も多かったであろう。「人声も時雨も聴いて」はその情景を表出しており、この情景を把握した作者は、作品の主体を「眠り猫」において、猫の幻想の中に一つの哀愁のようなものを感じとったのではないだろうか。

弟が巡礼に発つ秋日和

稲詩

作者がいつか「公職を定年退職した弟が四国巡礼に発つた」と話していたことを思い出したが、この「秋日和」は、出発当日の事実なのかも知れないし、また作者のそうあってくれればいいという願いなのかも知れない。

秋の一日は短かい。まして雨降りとなるとなおさら日暮れが速く、計画どおり巡拝できないことがある。

わたし自身四国八十八霊場を一巡しているのでその労苦はよく理解できる。「秋日和」は、そんな弟の労苦に對する作者のいたわりの心と願いなのかも知れない。

そうとらえると、この「秋日和」には作者の心理の振幅のようなものが感じられて、一句の中にぬくもりを覚える。

真白なシクラメンです幸せです エミ

口語敬体で書かれた作品にときどき出会ったが、その多くは事実の報告であったり、事柄や情景の報告であったりすることが多い。もちろん、作品化するときにどのようなことばを選び、どのような形態で表現するかは、そのことばや形態の効果を考えて選ぶ訳で、口語敬体で書かれたことを否定しているのではない。

その作品内容にふさわしい表現であればそれなりにいいと思う。

この句では「真白なシクラメン」と「幸せ」を「です」で言い切り、自然と人生を接合させ、白いシクラメンの清潔さが、人間の心を清らかにして幸せを感じさせていることは、詩心に若さが感じられてよい。ただ「です」の口語敬体がリズム的にはいいが、句の緊張感を緩めてしまった感じがする。

干大根母の吊した軒の釘 松生

昔の干大根風景として軒下に吊るされていたことが今でも鮮明に目に残る。この風景が見られる頃になる

と、冬も間近で、どこの家でも冬支度に入つたものである。干大根風景もそんな冬支度の一つであつたのかもしれない。

作品は、干大根を吊るすために母が軒下に釘を打つた、その釘が今でも残つており、作者はその釘を見て母を思い、母の干大根に郷愁を覚えてゐる。句は平明であるがすつきりとした詩心があつてよい。

どこまでも匂い残して刈田かな 嘉人

この句の「匂い残して」の匂いとは何の匂いなのか、一般の読者には理解し難いのではないか。

わたしが少年の頃、稲刈りをしていて刈り取つた稲の匂いと、それを育てた土の匂いがどこか似ていることを感じたことがあつた。あのむせ返るような稲の匂い、それは、その稲を育てた地の慈しみの匂いであり、土の恵みと温もりの匂いであつたのだ。こう考えてみると、この匂いは農業を営んでいる人だけが感得できる匂いといふことになる。その匂いは、広々とした刈田に広がつており、やがては来年の稲作へと役立つていくことになる。

古の柱に集つ後の月

利夫

十五夜を祝つのは一般的であるが、田舎では「後の

月」を祝つ風習も残つてゐる所があるのかも知れない。

「古の柱に集つ」であるから、その土地でも古いと言われている家に集つて「後の月」をお祝いしたといふことであるが、この集いは、お祝いが主目的ではなく、お互いに交流することが目的なのである。田舎では昔からいろいろな行事に縁者や集落の人たちが集つて宴会を開き、交流し合うことによつて絆を深め、相互扶助を高めていった。この句の「集つ」もそんな感じがついて、田舎の温もりが感じられた。

留守の家地べたに一つ南瓜かな 節子

田舎の農家でよく目にする情景である。誰もいない庭先に犬だけが寝そべっていたり、南瓜や大根が無造作に置かれていたり、都会の人たちに考えさせると嘘のような光景が現代でも田舎には残されている。それだけ静穏であるといふことになる。つか。

この作品の「地べたの南瓜」を通して、実景を越えた田舎の純朴さと心のあたたか味を感じとることができよう。

## 一庵句会

年の豆

馬場三枝子

年の豆百と二数ふ母在りき  
独居かな豆撒きの窓ひそと開け  
取りたての蜩酒蒸しぷりぷりと  
穴道湖へ夕日落ちゆくしじみ汁  
蓬摘む古りし播鉢洗ひあげ

ふんばれよ

阿部晴山

花便りまた雪だより一人坐す  
ふんばれよ自問自答の花三分  
雪割草一点を突く筆狂気  
春一番和紙一枚を城として  
南無妙と冬の噴水束ねたり

百合組

瀬良梅子

桜便り今か今かとテレビの前  
入学式孫は百合組笑香る  
入学の祝いに時計奮発す  
句席入りすすめる便り有難や  
亡き夫の蘭を株分け日は午後

花埃

小林むつみ

沈丁の香年々に通学路  
霾や娘は日付変更線を越え  
ミモザ揺れため息だけはわが時間  
花埃はたいて仕舞う宴かな  
白木蓮天に未来を問いかける

一陣の風

松澤 茂

かんしゃくの飛沫を逃げるこたつ猫  
春八寒かわいく咲きぬ雪割草  
朝日橋桜舞いたり人の声  
ウオーキング犬かけ足でついてくる  
一陣の風玄関に桜舞う

雜調度

竹内太郎

虚空掴む爪犬鷲の降りる時  
骨を咬む牙の音牙ゆ虎の檻  
料峭や耳に齒科医の金属音  
一針づつ繕ふ曾祖の代の雜  
縮緬の手縫ひふくらむ雜調度

遙かな山

木村鈴代

古典臨書す歌留多の歌ポツリかな  
冬晴れや遙かな山の名は知らず  
日ざし追ひ鉢を移すやシクラメン  
赤い実の一せいに消え冬の鴟  
二月の雨戸を繰れば根の目覚め

夕 闇

鈴木国子

うっぷんを舞い上げ空は花吹雪  
友去りし海棠の色あざやかに  
沈丁や友の背の闇夕闇へ  
筆重くまた軽き時風光る  
車窓は空へ空へと花わさび

桜 餅

竹村尚紘

そこそこの僥倖桜餅つまむ  
春曙マンモス目覚む異郷なり  
病む妻の敏き五感や茗荷竹  
藁やパンドラの箱閉めずおく  
読み漁る旅行雑誌や五月来る

ケア日記

大熊さと

自作棚そこだけ明るいヒアシンス  
ふと蝶の来て重なりし四葩かな  
ケア日記花のしおりをして閉じる  
足うらの雪解け熱くなる別れ  
託されし八十路の坂や土筆起き

## 一庵の風

小林むつみ

「独りで居ても善き風習を大切にしているという心意気を感じる」「独りの感慨をもっと強く出したい」ということで、独りなんだ、でも行事を大切にしているのだということろを強調し

独居かな豆撒きの窓ひそと開け

独居かなと切れにすることで、独りの感慨がより強くなりました。

寒さが一段と身にしむ二月の句会は、やはり春待ちわびる句です。その中で、果敢に自然に立ち向かう野生の強さを詠んだこの句に圧倒されました。

虚空掴む爪犬鷲の降りる時

太郎

「言葉の使い方が洗練されている」「虚空に心理的なもの、広さ、勢いを感じる」「空から急下降する鷲の姿が見えるようだ」「ただ、「掴む」と「降りる」で動詞が重なり対象がぼやけたので、これを整理し

犬鷲の降りて虚空を掴む爪

としたらよいのでは、という指摘がありました。

一月三日は節分。どっぴうわけかこの日はお母さんがはりきって鬼は外、福は内と大声を張り上げる家が多いようですが、最近では機密性の高い住宅事情もあって、ご近所の様子は窺えなくなりました。

独り居の豆撒きひそと窓開けて 三枝子

三月、春のたよりが嬉しいころ、陽気も心も、句もあたたかい。

町の子の一人遊びや寒雀

尚紘

「よく目にする情景を素直に詠んでいる」「すらすらと読める句だ」「寒雀は群れているものなので、一人遊ぶ子との対比がおもしろいし、寒雀に救われてもいる」と、共感を呼びました。

誰でもが通過する人生の春にさしかかる頃の子供の心、ほほえましく見守るだけです。

早春や十代の心のやつな等圧線 鈴代

「等圧線を句材にした気になる句」「気温の変化が激しい頃の等圧線の変化と、十代の心に通じるものがある」「早春の頃の等圧線に発見がある」「ただ、やや散文的なので、言葉を入れ替えて

十代の心早春の等圧線

入れ替えただけで、影響を受けやすい十代と等圧線を結びつかせた感性を、俳句らしい形で表現できました。なお、

十代の心の揺れや等圧線

として、作者は十代の心のななが等圧線と同じようだと感じたかを「・・・や」を使うことでより明確に表現できます。「や」はこのように使うと効果的であることを学びました。

四月の句会は桜の開花宣言も賑やかな頃に開かれました。気候が定まらない木の芽時の体調不全に加えて、近頃は花粉症などという国民的な病もあり、やや憂鬱な時期でもあります。

雪割草一点を突く狂気

晴山

「鋭い感性を感じさせる言葉使いだ」筆に対して狂気を持つという芸術家の境地が窺われる」また、一点を突くのは筆なのだから

雪割草一点を突く筆狂気

あるいは

雪割草一点突きし筆狂気

とすると、筆に芸術家としての狂気が反映する瞬間がある、と感じる作者の心象風景が解り易く伝わるのではないかという指摘がありました。可憐で静かなイメ

ージの雪割草という季語と、生々しい、時には荒ぶる人間の心との対比もこの句を魅力的にしました。

散歩をするには絶好の陽気です。待つてましたとばかりに芽吹いた草花、色あざやかに咲き出した花が、歩く道々で目に飛び込んできます。世話をする人の丹精が惚れます。一庵句会も花盛りとなりました。今回の花の句から一句ずつあげました。

又中トビメモ添えられて裏口に 三枝子

小説に奇なるものあり雪柳 太郎

菜の花畑魔女はいつでも猫使う 真樹

錦木の芽ぶきや日暮れほの赤く 鈴代

灯を入れてしだれ桜の抱く闇 夏子

ふんばれよ自問自答の花三分 晴山

すみれ咲くタカラジエン又の袴形 尚紘

ミモザ揺れたため息だけはわが時間 むつみ

花といえはやはり桜でしょうか。今年も大勢の人が桜の木の下に集まり、ひと時の幽玄を、あるいは花見酒に酔いしれたようです。

さて、この次の句会にはどんな感動や発見があるのでしょうか。

一庵句会には穏やかなそよ風が吹いています。

## 藤の会

含羞

若泉真樹

神となる樟の大樹や初御空  
侘助や変体仮名の句碑読んで  
落椿の重きを拾う墓標かな  
渾身で鷗飛びなり春嵐  
ポケットに含羞錆びる白椿

空目

大山夏子

縞馬も猯も横向き初景色

禅寺のはりつめし気や蔭の臺  
法華経の板戸の空目梅の花  
大風車発電開始鳥雲に  
五臓六腑電脳もまた春の風邪  
閻魔堂 福山至遊

律義者の賀状型通りの楷書  
川風の色街七福神詣り  
すれすれに車が通り寒明ける  
結界のあるやなしやと梅満開  
来る人と去る人閻魔堂おぼる

猫柳

廣戸次郎

枯蓮の乱れし丈の低きかな  
水かけし砥石色めく冬ぬくし  
除夜の鐘小芥子の面の薄れいて  
雀等の水場に水足す建国日  
陽を溜めし綿毛や今朝の猫柳

春浅し

石川賢吾

初空や富士見通りの水溜り

刀研ぐ匠の眼涙返る  
皿まはすピエ口の涙春浅し  
干物屋の七輪囲む余寒かな  
暁天の青を深める花辛夷

竹の秋

竹内太郎

水面鏡溶けて白鳥旅立ちぬ  
春愁をゆつくり回す観覧車  
半眼の小さき地蔵や竹の秋  
春菜和へ黄瀬戸の小鉢取り出して  
往く人や石の平らに落椿

酉の市

吉宇田知英子

正月の凧からまりてと駄案内  
春を待つ蕾小さし風の中  
十二月歪みを直しきれぬまま  
しゃんしゃんと手締め託す酉の市  
夕暮れや水やる人の耳袋

初釜

伊藤浩子

三階の窓額縁に冬木立つ

冬の市手水に並ぶ巢鴨地蔵  
初釜や華やかなりし躍り口  
のろのろと轍に頼る雪の夜  
観覧車見上げて残る寒さかな

夕桜

数藤弥太郎

福寿草八十歳になりにつけり  
己が影小さくなりし冬木立  
啓蟄や隣家の声が聞こえ出す  
花の散る和船漕ぎゆく小名木川  
夕桜今年も見上ぐ我ひとり

新しき出会い

馬場龍雨

新しき出会いはうれし春の雨  
鶯替えて邪鬼も隠れておりにけり  
皿洗ふ手付きも慣れし弥生かな  
啓蟄や世間を騒がす事多し  
世界地窓眼移せし春の雪

漱石忌

遠塚青嵐

物陰に猫の潜みて漱石忌

男岩にイーゼル立て銀杏降る  
川沿いに雀等集う枯葎  
神主の所作事揃い去年今年  
訃の友と暗き酒場のおでん酒  
隨筆

## 抗加齢と俳句

廣戸次郎

最近「抗加齢」と言つ言葉を目にする。「加齢」とは新年または誕生日を迎えて、年齢を増すことであるから、これに抗すると言つことが。インターネットで検索してみると、医学や美容の世界で使われている言葉であることが分かる。

医学的に「抗加齢」は、肉体的な若さの維持あるいは回復のことらしく、また美容の世界では、必然的な容姿の衰えを様々な方法で改善することの様である。街にもこの手の情報が氾濫し、最近ではスポーツジムや

美容整形医院が盛況と聞く。確かに肉体的に健康で、外見的にも若く見られることに越したことはない。

日々の生活を健康的に過ごすこと、特に生活習慣病に陥り易いことは避け、ストレスは適度に解消し、経済的に可能な範囲で、容姿に配慮することは必要なことである。しかし、むしろ必要なのは、心の持ち方としての「抗加齢」ではないだろうか。

世の中には、会って若さを感じる人がいる。得てして未来志向であり、発想が柔軟且つ感性が豊かで、話が面白い。天賦のものと言われるとなんともし難いが、少しは努力の余地がありそうである。

まず感動すること、無理であれば「おやつ?」と思うこと。それも「季節の移ろい」に絞ってみると、何かが見えてくる

私の場合、至遊さんにきつかけを作っていたとき、藤の会に入会してから五年目に入った。お陰で「季節の移ろい」に「おやつ?」と感じて、類想句の山を築いている。どうも素材が脳裏を駆け巡る際の「シナプス」に問題がありそうである。自分の眼で見て作為を消し、できれば楽しい句を作ってみたい。これが自分にとっての「抗加齢」と考えている